

最近の小事

有限会社 仁礼取締役社長 星野隆幸

「小事を気にせず流れる雲の如し」、若い頃に見ていた、ジョージ秋山氏の漫画、浮浪雲の主人公、問屋場「夢屋」の頭、浮浪雲の言葉である。その頃はそんな主人公のような人生を送りたいと意味も解らず本気で考えていた。



最近、もっとも気になっている小事がある。昨年流行語にもなった「おもてなし」という言葉だ。「おもてなし」は、日常の立居振舞から溢れくる優しさだと思っている。それが何故か簡単に言葉として溢れてしまった。外国から、はたまた、他の地区からお客を呼び込むために「おもてなし」を掲げて、こんな「おもてなし」ができますといった、観光PRが日本全国に溢れている。本来日本人が心の奥底に持っていた何気ない振舞を、表に立ててしまったその瞬間に、「おもてなし」は単なるビジネス道具に成り下がってしまった。

言葉だけが独り立ちして走り始めた「おもてなし」を大事に抱えて町興しに使ったところで決して長続きはしないのではないか、表立った「おもてなし」は、「おもてなし」の押し付け以外の何者でもなく、「おもてなし」は、本来受けた人が心を感じることで、「おもてなし」しましたでは本末転倒である、そんな「おもてなし」は、一度体験すれば二度目は想像が付き、想像と違えば人は離れてゆくものではないだろうか。

日本を震撼させた震災津波の後に世界が感動を伝えた日本人の行動、それは決して世界の人々に評価されたくて取った行動ではないはずで、世界が伝えた礼儀正しさでもなく、ごく当たり前に日常の事として極々普通に子供から大人まで、それ以上でもそれ以下でもなく、私たちが受け継いできた世界の人々が想像すらできない計り知れない無償の優しさなのだと思う。我を抑え他人を思いやり、空気のように水のように淀む事無く絶えず流れ、野辺に咲く名もない花のように、ただそこにあるその無償の優しさこそが、世界の人々が日本と言う国、そして日本人に敬意を持つ原点となっているのではないだろうか。

私の暮す宮崎県日南市は、風光明媚、気候も温暖で時間がゆっくりと流れている海沿いの小さな町、観光以外にこれといった産業もなく、ご多分に漏れず人口減少が進む消滅市町村の一つではあるが、そんな中でも、世界に、全国に進出している企業もあり、昨年には16万tクラスの国際観光クルーズ船が着岸できる港も整備され、グローバル化の波は確実にこんな田舎町にも押し寄せている。

さてさて、今後訪れるであろうお客様、世界の人々を相手に何ができるのか、そんな小事にあたふたしている毎日では、「小事を気にせず流れる雲の如し」のような飄々とした人生なんて、まだまだ遠い存在のようである。

